
日本最長の恋愛？

菖蒲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日本最長の恋愛？

【Nコード】

N5473A

【作者名】

菖蒲

【あらすじ】

剣道の試合のため、東京に来ていた主人公。試合の方は順調で、ベスト4に残ったのだけれど……突然現れたショートの怪人（？）や、その兄貴、それに謎の師匠に振り回される主人公。謎が謎を呼ぶ本格ミステリー……ではありません。恋愛小説です。

アンタ誰でいすか」

「パーン！」

静寂に包まれた会場の中で、小気味の良い音が響いた。静寂が一気にざわめきへと変わる。

「面あり、勝負あり」

審判の宣言を聞き、相手に一礼して、俺はコートの外へ引っ込み、面を取った。

「ふう」

面を取った瞬間、心地よい風が頬を撫でる。しばらくその余韻に浸っていたが、その内、会場の熱気に耐えられなくなり、俺は会場の外へ移動した。

外へ出ると、再び心地よい風が、今度は俺の体全体を通り抜けていった。いやー、この感触が気持ち良いんだよね。

「あと、二回か……」

俺は小さく呟く。俺は今、剣道の全国大会に出場するため、東京に来ていた。二回と言うのは、優勝までの試合数である。今日、個人戦のベスト4までが決まる。俺はさっきの試合で、ベスト4に残ったのだ。残りの試合は明日なので、今日はとりあえず何もする事は無い。本当ならホテルに帰るべきなのだが、付き添いの俺の道場の先生たちはまだ試合を見ているので、こうしてブラブラしているという訳だ。

「さて、どうするかな……ってうわッ」

しばらくブラブラしていると、急に、誰かに腕を引っ張られた。

「なッ……」

予想外のさらに外の出来事に俺が絶句していると、人気の少ない裏路地に引っ張り込まれた。この条項は……じゃなかった状況は、

もしかしてピンチ？

「うわッ」

などと考えていると、俺はいきなり、腕をつかんでいた男に突き飛ばされた。その勢いで、俺は尻餅をついてしまう。抗議してやろうと立ち上がって、その男のほうを見ると、4〜5人の男たちが立っていた。一人と思っていたが、どうやら多人数だったようである。いやあ、中々計画的なこつて。一人一人顔を見てみると、どいつもこいつも陰険そうな顔立ちで、とても友好的とは思えない視線を投げかけてくる。

「よお、阿久沢君。さっきはどうもありがとう」

未だ、状況が理解できていない俺に、真ん中に立っていた男が話し掛けてきた。なんか馴れ馴れしいけど、アンタ誰でいますか？
ていうかその前に、コイツなんだった？

「さっき？」

まったく意味がわからない。こんな奴等とは会ったことも無いはずだ。ん？ いや待てよ、そういえばどっかで見たような気も……。そんな俺の心情を察したのか、さっきの男が親切にも事情を説明してくれた。

「さっきの試合だよ。つたくてめえに勝てば俺がベスト4だったの
によお、どうしてくれんだよ」

おお、そうかさっきの俺の対戦相手か。どうりで見た事あると思
った。いやあ、そうかさうか……。じゃなくて、なんつだその訳の解
らん言いがかりは？ いや、確かにアンタを倒したのは俺だけど、
今時そんなガキみたいな理由で喧嘩売ってくるか普通。武道やって
んならもうちつと潔くあれよ。あー、なんか怒り通り越して呆れて
きちまった……。とつと張り倒して帰るか。と、俺が思った瞬間、
更に訳の解らん事が起こった。

「やめてください」

その男たちのさらに後ろの方から、誰かの声が聞こえてきた。何
だ？ もしかして誰か助けに来てくれた？ ラッキー、それなら早

くヘルプ、み、い……。一瞬、淡い希望を抱いた俺だったが、それは、その声の主を見た瞬間に、脆くも崩れ去った。世の中そんなに甘くないってね、いや、むしろしょっぱいだろ。何故かって？だって、そこに立っていたのは……物凄い綺麗な女の子だったからさー、アーハッハッハ……。どぼじでそうなるの？

……厄日か？

そこにはものすごい綺麗な女の子が立っていた。歳は俺と同じ位か一個下（俺は14）。端正な顔立ちで、身長も結構高い（160cmくらい？）。言ってみれば、妖精のような感じである。

そんなことはどうでもいいとしてだ。問題は、何故そんな女の子が明らかに場違いなこの場所にいるのか、ということである。

「あの」

ふいに、その女の子はものすごい細かい声で呼びかけてきた。そこで、俺を始め、世界天然記念物（俺の中で既に決定）の人々もフリーズから開放される（この人達は今までずっと止まっていた）。

「なんだ、てめえは」

フリーズから開放された天然記念物その一が、その女の子に怒鳴りつける。

「ひ、一人を大勢で囲むなんて卑怯だと思います」

男の声に、少し怯んだようであったが、なんとか声を搾り出している（男の質問の答えにはなっていないが）。

「んな事でめえにや関係ねえだろうが」

男のうちの一人が、そう怒鳴りつけながら俺に背を向けその女の子の方に歩いていく。他の天然記念物その2と5の注意もその女の子の方に向いている。チャンス、そう思った俺は、俺に背を向けた男に対して思いっきり飛び蹴りを喰らわせた。

「ぐえ」

まったくの不意打ちにその男は、ベシヤツ、という効果音が良く似合いそうな形で前のめりに倒れた。女の子の方に注意が向いていたその他の男たちも、一瞬反応が遅れる。

「行くぞ」

俺は、飛び蹴りを男に喰らわせた後、振り向きもせずその女の子の手を取って走り出した。

「えっ、えっ」

その女の子は動揺しながらもちゃんと走ってついてくる。

「待ちやがれ」

と、天然記念物の皆さんが叫ぶ声が聞こえたが、もう遅い。俺と女の子は驚異的なスピードで会場の方へ向かっていた。人間やれば何でもできるものである。案外会場から遠くなかったので、すぐに会場の中へ入る事ができた。流石に会場の中までは追ってこず、とりあえず一息つくことができた。その女の子も俺も相当息があがっている。

「ハア、ハア……あ、あの……」

ふいに、その女の子が声をかけてきた。

「阿久沢桂さんですよ」

「ハイ？」

これまた予想外の外の攻撃に、俺は再びフリーズする。何故にこんな女の子が俺の名前を知っている？と言うよりコイツは誰だ？と言うか今日は何だ？厄日か？シヨ　カーの陰謀なのか？それともザン　カール帝国の強襲か……、などと俺が訳のわからん思考ループにはまっていると、

「あの、阿久沢さん？」

と、その女の子が心配そうにこっちを見ていた。

「えッ、あ、ああ」

そこでやつと思考ループから抜け出した俺は、とりあえずこの状況を整理してみる事にした。

「よし、んじゃあ、俺がこれから多数質問をするからあんたはそれに答えてくれ。まず、あんたは誰だ？　なんで俺の名前を知っている？　何でさっきあそこにいた？　あんたはシヨ　カーの戦闘員か？」

いきなりすぎる俺の質問に（ひとつ意味のわからんものが入っていたが）、その女の子はしばらく眼を白黒させていた。流石に答えられないかと思っていると、急に持ち直し、

「えっと、私は真宮寺臯月です。阿久沢さんの名前はさつき準々決勝に出てたから知ってます。さつきあそこにいたのは、なんか怖そうな人たちに阿久沢さんが囲まれてたからです。……シヨ カー？」

と、全部答えてきた（流石にシヨ カーはわからなかったようだが）。俺はまさか全部答えてくるなんて思っていなかったたので、一瞬呆気にとられたが、なんとか平静を装って再び問い掛けた。

「え、と真宮寺さん？とりあえず俺の名前を知っていたのは納得した。だけど、あそこにいた理由が全然意味がわかんないんだけど……」

そう、俺が囲まれていたから、なんて言うのは理由にならない。大体俺たちは見ず知らずの他人なのだから。すると、その女は、

「え？ 意味がわからないってどういうことですか？ 困っている人を助けるのは当然の事だと思うんですけど……」

と、俺のこけそうな返し方をしてきた。なんて女だよ……、こいつは宇宙天然記念物に認定できる（もちろん俺の中で）。今時そんな考え方をしてるのはどっかの少年誌の王道物の主人公ぐらいだぞ、と叫んでやりたかったが、なんとか押し留めた。

「あのなあ、あんた自分の事考えなかったわけ？ あそこで逃げ出せたから良かったようなものの、逃げれなかったらどうなったかわかったもんじゃないんだぜ」

俺は、心底あきれ返ったようにして（半ば意識的に）言った。だが、その女はまったく意に介した様子は無く、平然と、

「まあ良いじゃないですか、助かったんですし」

と言った後、小さく笑った。本当に妖精のような笑みだった。もともと綺麗とは思っていたが、笑うとさらに綺麗になる。そこらのアイドルなんて裸足で逃げ出すレベルだ。俺はうかつにも、そのなんとも言いがたい笑顔に思わず見ほれてしまった。

「阿久沢さん？」

ハッと気付くと、不思議そうな顔をした真宮寺臯月がこっちを見ていた。しまった見られたか、と内心ドキドキしながらも俺は平静

を装って次なる質問へと移ろうとした。が、

「おい、皐月」

突然前方から声が聴こえてきた。見ると背の高い（180くらいか？）男がこっちに向かって手を振っていた。横に目をやると真宮寺も手を振っている。どうやら知り合いらしい。

「おい皐月、今までどこほつつき歩いてたんだ？ 皆もう帰り支度できてるぞ」

傍までやってきたその男は、俺には目もくれず真宮寺に話し掛ける。

「ゴメン、お兄ちゃん。ちょっといろいろあつてね」

真宮寺の方もそれに答える。いったい誰なんだこの男は？ ……
つてお兄ちゃんかよ。言われてみれば、なるほどコイツもコイツでかなり整った顔立ちしてやがる。その長身と堀の深い顔はどことなく中世の騎士を思わせる。と、俺がそんな事を考えていると、そのお兄ちゃんとやらがこっちを向いて怖い顔をしている。真宮寺が横でなにやら言っているが聞こえてないらしい。すると、今まで体をプルプル震わせてこっちを睨んでいたのが、フツと力が抜けたようにうなだれている。

「？」

俺が不思議に思っただけで近づいてみると、その男はいきなり、

「このド変態エロティックスケベ痴漢野郎があああ！」

と、ガバツと起き上がり、油断している俺に対して思いっきり殴りかかってきた。ちくしょう、この野郎とんだ食わせ者だよ。まったく何なんだってんだ今日は？

ド変態イロ吉スケベ君？

「このド変態エロティックスケベ痴漢野郎があああ！」

と、いきなりお兄ちゃんさん（名前知らないからさん付け）に殴りかかられた俺は、

ドゴッ！

と、その攻撃をまともに受け、地面に突っ伏した。……と、普通はなるだろうが、俺の場合はちと違う。

「このド変態……（以下略）」

と、いきなり殴りかかられた俺は、その繰り出されたパンチを咄嗟に避けて、条件反射で思わず反撃のミドルキックを出してしまった。そのキックをまともに受け、

「ぐえ」

と、お兄ちゃんさんは地面に突っ伏してしまった。

「ヤバイ……」

俺は焦りまくった。何を隠そう俺は剣道の他に古武術を習っている。戦国時代に造られたとかいう格闘技だ。なんでも素手で敵軍に突っ込んでいって、更に勝つ事を目的とした武術だったらしい（今は弱体化しているが）。その俺の蹴りをまともに喰らったら相当ヤバイのである。

「ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ……」

と、俺が取り乱していると、お兄ちゃんさんが、

「つてえなこの野郎！」

と、なんと立ってきやがった。

「なっ！」

俺は言葉を失った。まさか俺の蹴りをまともに受けて立ってこられる奴がいるなんて思ってたのである。俺がボー然としていると、

「くっそ、この変態野郎が」

と、お兄ちゃんさんが言った。……ん？ ちよつと待てよ、さつきから自然に言われてるけど、いつから俺は変態になった？ まさかと思ってお兄ちゃんさんに訊ねてみる。

「あのー、お兄ちゃんさん？ ちよつと質問したいんですけど、さつきあなたの妹さんになんと言われましたか？」

「あ？ てめえよくもぬけぬけと、まあ良い教えてやるぜ。皐月はな、「阿久沢さんがいて、それから声を出したら迫ってきて、手を引っ張られて逃げて、でも追ってきて、やっと会場についたらお兄ちゃんに声をかけられたの」って言ったんだよお」

俺は頭が痛くなつた。この女、そんな言い方したら勘違いするに決まってるだろうが、主語が抜けてるよ、主語が。たく本当に厄日だ今日は、こんな事ならあの天然記念物どもさっさと張り倒しときゃ良かった。俺が本気で後悔していると、

「で、もう質問は無いのかな？ ド変態イロ吉スケベ君？」

と、お兄ちゃんさんが顔をヒクヒクさせながら訊ねてきた。言葉は丁寧（？）だが、声には殺気がぎっしりと詰まっている。もういい加減こんな事してられん、と思った俺は、目の前で顔をヒクヒクさせているお兄ちゃんさんに事情を説明した。が、

「……っていう訳なんですけど」

「んー、そつかそつかあ、悪かったねえ。お詫びといっちゃ何だけど……、これでも喰らえこのド変態エロティックスケベ痴漢おまけに嘔吐き野郎があああ！」

と、また殴りかかれた。またさっきの再現か、と思ったが今度は様子が違った。さっきのとは段違いに速く、腰の入ったパンチである。

「ちい」

と、どこかで聴いたような台詞を吐きながら、間一髪それ避免了俺は、反撃しようと拳を繰り出したが、腕を跳ね上げられ、さらに膝蹴りが飛んでくる。なんとか弾かれてない方の腕でそれをガードした俺は、少々面食らっていた。

（何だこいつ、強い。これ、どう考えたって普通じゃないだろ……まさか！）

うかつにも戦いの最中に考え事していた俺は、お兄ちゃんさんの繰り出した前蹴りをまともに受けてしまった。

「ぐッ」

あまりに重いその蹴りに思わず吐きそうになってしまったが、何とか堪えた俺はさっきの疑問を確信にして口に出した。

「なあ、まさかあんた古武術やってないか？」

その俺の質問に、お兄ちゃんさんの顔が驚愕に彩られる。

「あ、ああ、確かにやっている。しかし何故お前がそれを知っている？」

「ああ、だって俺も古武術やってるもん」

それを聞いたお兄ちゃんさんは、口をポカンと開けて放心した。

何故なら、古武術において、同門に喧嘩を売る事は例えどんな理由があろうとも禁止されているからだ。ちなみに規則を破れば厳罰、それが古武術の掟である。

あれ？　ところで、真宮寺は？　……あ、いた。あっちゃあ、こいつも口開けて放心してら。

……長い

「……長い」

俺は一人ぼつんと呟く。真宮寺兄妹が放心してから既に5分、一体いつまで放心（現実逃避？）していれば気が済むのであろうか？もう戻ろっかな、などと考えていると、

「……ハッ、ここはどこ？ わたしはだあれ？」

お兄ちゃんさんが何やら意味のわからん言葉を吐きながら現実逃避から戻ってきた。

「ここは、東京武道館だ、んであんたはその真宮寺皐月とか言う女の兄貴」

ほっとこうかとも思ったが、とりあえずその問いに答えてあげた。すると、

「ちッ、ちよつとぐらい現実逃避させてくれても良いじゃねッかよ」お兄ちゃんさんが復活（やはり、錯乱しているフリだったか……）

した。俺は、もう十分現実逃避の時間をあげたつもりだが、敢えてそこは突っ込まず、さらに厳しい現実を突きつけてやる。

「んで、同門に喧嘩売った場合の罰だけど……、「滅」と「極」、どっちが良い？」

ちなみに「滅」は、自分の師匠から制裁を受ける罰で、「極」は、一週間の間の絶食である（「滅」は、自分の身体が滅びるかと思うくらいに痛めつけられる事からその名前が付き、「極」は、極限まで食欲と戦わされる事から来ているらしい）。現実逃避したくなるのも無理は無い。

「マジかよ……」

お兄ちゃんさんは既に顔が真っ青である。可愛そうに、俺に喧嘩を（勘違いで）売ってこなければこんな事にならなかったものを……。とは思っが、

「マジです」

やっぱり罪は罪、しつかり償ってもらわねば。

「んで、あんたの師匠は？」

こういう場合、後の事は相手の師匠に任せる事になっているので、とりあえずそいつの師匠について聞いてみたものの、ここには剣道の大会で来ている訳であって、古武術の師匠なんているはず無い。慌ててさっきの質問を取り消そうと思ったら、

「ああ、師匠ならもうホテルに戻ってるはずだ」

来てるんかいッ！ と、ツツコミを入れるが、その時にお兄ちゃんさんの顔が少し安堵した表情になっていたのを俺は見逃さなかった。

「よし、んじゃあ、あんたらのホテルまで行こう」

その言葉で、今度はお兄ちゃんさんの顔が一気に暗くなる。その顔を見て、思わず笑い出しそんな自分に対して、やっぱり俺って性根腐ってんなあ、などと思っていると、

「ま、待って下さい」

ようやく再起動に成功した真宮寺が叫んだ。目を向けると、涙を目一杯に溜めている真宮寺がいた。やべえ、可愛い、などと思っていると、真宮寺が、

「お願いです、許してあげてください。悪気があった訳じゃないんです」

と、必死に頼んでくる。まあ悪気が無かったって言うのはわかる（ていうかコイツが勘違いしそうな状況説明したからだし）。でも一応規則は規則なのだ。そう真宮寺に言ってやると、

「そう……ですか……」

と、無茶苦茶落ち込まれた。ここまで落ち込まれると流石の俺もちょっと同情する。大体女の泣なんて（男のもだが）あまり見たいもんじゃない。

「じゃあない、じゃあこれでどうだ。俺があんたらと一緒にそのホテルまで行ってお兄ちゃんさんの師匠に事情を話す。多少の制裁はあるだろうがなるべく恩赦してくれるよう頼んでやる。これで良い

「だろ？」

俺も甘いな、などと思いつつそう提案してやると、

「ハイッ、ありがとうございます」

と、真宮寺は心底嬉しそうにしている。

「お兄ちゃんさんもそれで良い？」

向き直って、お兄ちゃんさんにも聞く。

「ああ、それで良い。……悪いな」

まだ元気が無いが、少し安心したようである。それから少し話したあと、俺たちは問題の師匠の待つホテルへ向かった。

「ここだ」

「んなッ……」

俺は驚きのあまり言葉を失った。連れて来られたのはどう見たって、所謂一つのコウキユウホテルってやつだった。

「どしたい？」

皇紀（真宮寺の兄貴の名前、ちなみに俺とタメらしい）が不思議そうに聞いてくる。

「え、あ、いや、まじでココな訳？」

俺にはまだ信じられない（小市民の俺がこんな高級そうなホテルを思い浮かべるはずが無い）。

「当り前だろ」

皇紀はさも当然とでも言うかのように答える。その隣で真宮寺もウンウンと頷いている。俺はポカンとしていた。それはもう馬鹿としか言いようが無い位のアホ顔で。他人が見たら絶対指を指されて笑われるだろう（実際見られているが……）。

「ほら、入るぞ」

そんな俺の背中を皇紀が押し、その前を真宮寺が歩いて俺たちはホテルの中に入った。中に入ると皇紀は、師匠を呼んでくると言っで、どっかに行ってしまった。で、する事も無いので、真宮寺と暫くボケーツとしてると、師匠を呼びに行った皇紀が戻ってきた。

「桂、こちらが俺の師匠だ」

どれどれ、どんな人だ？ と興味津々でその人の顔を見て目が合った瞬間、俺とその人は他人の迷惑も考えず、目一杯絶叫した（シンクロしながら）。

『あーッ！ あ（お）、アンタ（お前）はあああああ！』

八年前……

『あ（お）、アンタ（お前）はあああああ！』

と、ひとしきり（シンクロしながら）絶叫し終わった後、俺はいきなりその男に殴りかかられた。尋常ではないスピードで拳が飛んでくる。が、俺も予想済みだったので身体を横に捌いて避け、ほぼそれと同時に男の肩と首を掴み、反撃の膝蹴りを入れようと思いきり膝を振りぬいた。はずだったのだが、その膝は男の鳩尾みぞおちの数センチ手前で止まってしまった。見ると男はいつの間にか戻した手でガードしている。ふいに男と目が合った。ほとんど同時にして一瞬、俺と男は「フツ」と笑いあった。それからの俺たちの攻防は激しかった。すばやく飛びのいて男から離れた俺は、すぐさまハイキックを放つ（「ジャブ」だの「ロー」だのして様子を見るのはルールのあるリングの中だけ、実際のルールなしの戦いでは常に先手を取ることが要求される。先手を取った後、強引に自分のペースに持つていけばいいのだ）。だが流石に男も慣れている、しゃがんでいなし、すぐさま反撃に移ってくる。だが俺もただハイキックを撃ったのではない、避けられるのは考慮に入れていた。

「喰らえッ」

俺は男の頭上を通り越した脚を強引に男の頭の上に戻し、踵落しを放った。流石に予想外だったのだろう、今度は避ける事はかなわず、男は腕で俺の踵落しを受けた。俺は男が受けたのを確認して、脚をどけた。それから暫く、俺と男は見合っていた。周りでは皇紀と真宮寺を含めホテル内にいる人間のすべてがただ啞然としている（ま、当たり前だろう）。

『フツ』

どちらからとも無く俺と男は笑い出した。

『ふはは……ふははは……はーっはっはっはっ』

傍から見たらかなり異様な光景であるう、こんな高級ホテルの中

でいきなりストリートファイトをおっぱじめた男二人が、今度は一斉に笑い出したのだから。だがそんな事はお構い無しである、俺も男も笑い続けている。暫く笑いあつた後、俺は男に話し掛けた。

「久しぶり、隼人さん。相変わらず強えなあ」

そう、俺はこの人と知り合いである。この人は石動隼人、俺に古武術を教えた人物である。性格はかなりいい加減だが、強さは折り紙つき。俺の師匠であり、目標だった人だ。それが、4、5年前まで宮崎に住んでいたのだが、急に北海道へ引っ越してしまったのである。そういう訳で今まで連絡が取れなかった訳だが、まさか皇紀の師匠だったとはねえ。偶然が重なり過ぎている気もするが、まあこの際良いだろう。そうこう考えているうちに隼人さんも返事をしてくれる。

「久しぶりだな桂。にしてもお前随分強くなったな、見違えたぞ」

その言葉は結構うれしかった。なぜならこの人は俺の永遠の目標なのだ。その人に誉めてもらったのだから自然と顔も緩んでしまう。そしていろいろと話し込んでみると、横で啞然としていた皇紀が隼人さんに話し掛けた。

「し、師匠、そいつと知り合いなんですか？」

大分驚いているようである。まあ無理も無いだろう、今日知り合ったばかりの赤の他人と自分の師匠が知り合いだったのだから。それに対して、隼人さんは、

「おお、そうかお前は知らなかったな。こいつは俺が宮崎にいたころの弟子だ。お前らにも良く話してやつたろ。て言うか写真見せてやらなかったっけ？」

と返す。ん、ちょっと待て、俺のこと話したのかこの人。なんか不安になってきた。なぜならこの人は人の事を有ること無いこと付け加えて話するのが大好きなのだ。どんな事を話されているか知れたもんじゃない。そこで俺は、

「隼人さん、俺の事まともに話したんでしょうね。くだらない脚色なんか付けてたらそんなときや……」

と言ってバキボキと骨を鳴らす。こういう時の隼人さんはえらく腰が低くなるため、こちらは強く出れる。

「ははは、大丈夫だって、まともに話したよ。そうだ、お前の事話したときによお、皐月が合いたいって言い出したことがあったんだよ、写真見せたときだったかな？　そんな時「一目惚れか？」って冗談半分で聞いたらよお、あいつ顔真っ赤にして俯きやがったんだよ。ありや完璧お前に気があるね。お前アプローチかけてみたら？」

そうか、まともに話したか、良かった良かった。ん？　真宮寺がなんだって。一目惚れだあ、確かにあいつは可愛いしそれなら嬉しい限りだけど、んな都合のいい話あるわきゃ……待てよ、確か写真も見せたって言ったな。となるともしかしてさっきのは偶然じゃなかったのか。考えても仕方が無いので、俺は真宮寺に直接聞いてみることにした。

「おい、真宮寺」

「あ、はい」

「お前よ、隼人さんから俺の顔と話聞いてたんだってな」

「……」

「て事はよ、さっき俺の顔と名前を既に知っていたと言う事に納得のいく説明がつく。よくよく考えたら準々決勝に出てたからって言うて、俺は面をかぶってたんだから顔まで知ってるのはおかしいよな」

「……」

「つまりだ、俺が言いたいのは、さっきお前があそこで止めに入っただけはただのお節介じゃなく俺だったからじゃないのか、ってことだ。どうだ、当らずとも遠からずってところだろう」

「……はい。その通りです」

案外あっさり白状したな。もっと誤魔化すかと思ったが、まだ疑問は残る。

「なんでだ？　いくら俺の顔を知っているからと言って俺を助ける理由がどこにある。俺たちは赤の他人だぞ」

隼人さんが言ってた事はこの際無視だ。俺はこいつの口から直接理由を聞きたい。少して、真宮寺は口を開いた。

「やっぱり覚えていないんですね。そうですね、もう8年も前ですもんね」

その口調は寂しそうだつた。にしても8年前つて何があつた。俺にはまったく記憶が無い。俺が唸っていると、真宮寺が、

「あ、いえ、別に無理に思い出してくれなくても構いません。ちょっと悲しい気もするけど」

と言つてきた。いや、そんなに悲しそうな顔するなよ。なんか俺が悪い事しちゃったみたいじゃねえか。8年前か……、なんかあつたかなあ。駄目だ思い出せない。しょうがない、真宮寺に聞くか。

「なあ、8年前つてなにがあつたんだ？ 悪いけど教えてくれ」

俺がそう言つと、真宮寺は少し迷つたような表情を作つたが、すぐに、

「そうですね。私だけ覚えてて、阿久沢さんは覚えてないつていうのはなんか癪ですしね。わかりました、お話します」

と言つてくれた。だが、俺はこのときその内容が、俺が真剣に古武術を習い始めるキツカケとなつていたことなど、知る由もなかった。

王子様が助けに参りましたよん

あるところに一人の女の子がいました。その娘の名前はサツキと言います。サツキは、幼いころから剣道を習っていて、その日は試合で宮崎まで来ていました。そしてその会場で、サツキはある事件に巻き込まれます。それが、ある少年との最初の出会いのきっかけでした。

サツキは、一人ぼつんと林の中を歩いていました。自分の試合は終わってやる事もなくなったので、他の人の試合が終わるまでブラブラしていようと思ったのです。サツキは、その林が気に入っていました。別にこれといったものは無いのですが、その葉っぱの擦れあう音が、妙に気に入ったのです。サツキは、暫くそこを歩いていました。ふと、林のざわめきが消えました。少し気味が悪くなったので、そろそろ帰ろうかと思って会場の方へ歩き出すと、知らないおじさんが目の前に現れました。

「君、一人？」

「は？」

余りにも怪しさ爆発の発言のため、サツキは思わず素っ頓狂な声をあげてしまいました。このおじさん、どう見たって変質者です。ということでサツキは無視して走り出しました。変な人にあつたら無視して逃げなさいと親に言われていたのです。ですがそのおじさんは、サツキの手首を掴んで逃がすまいとします。

「そんな無視しないでさあ、一緒に遊ぼうよ」

サツキは、苛立ちよりも嫌悪感を感じました。それほど気持ち悪く、怖かったのです。

「嫌ッ、離してください」

サツキは逃げようと手を振り払おうとしますが、サツキはまだ6歳の女の子なので、振り払う事が出来ません。それどころかおじさ

んは、痛みを感じるほど、よりいつそう力を込めて手首を掴んできます。

「キャ……ムグ……」

サツキは叫ぼうとしましたが、おじさんに口を抑えられてしまいます。サツキは恐怖と嫌悪で震えだしました。

「んゝいいねえ、かわいいねえ」

おじさんはそれを実に楽しそうに見ています。サツキは絶望しました。自分はこのまま誘拐されてしまうんだと。ところが、

「オッサン、いい歳こいて誘拐なんてやってんじゃねえよ。犯罪だよ、犯罪」

いきなり後ろから声がありました。おじさんにつられてサツキも後ろを振り返ると、そこには、自分と同じくらいの男の子が立っていました。おじさんを見上げてみるとプルプル震えています。そこにさらに追い討ちをかけるように男の子は言います。

「オッサンロリコンってやつ？ もゝいい歳して、何やってだか」

その男の子の口調には明らかに侮蔑の色が混じっていました。

「僕、いい加減その口閉じないとおじさん怒るぞ」

おじさんはいい加減頭にきたのか少し怒った様子で言いました。しかしその少年は、そんなおじさんなど気にした様子も無く、サツキに、

「いよオ、捕らわれの姫様。王子様が助けに参りましたよん」

と、とても楽しそうに微笑みながら声を掛けました。サツキは、なぜだかその時胸の高鳴りを感じました。サツキは本が大好きで、特に白雪姫などに代表される「王子様がお姫様を助けに来る」というシチュエーションにずっと憧れていました。なのでこの状況で、しかもあんな台詞を吐きながら目の前に現れたその少年に、サツキは言いよつたの無い感情を抱いたのです。分かり易く言うと思われちゃったのです。サツキは、しばらくその少年の顔を見つめていました。少年もサツキに微笑んでいましたが、無視されたのが頭にきたのか、おじさんが顔を真っ赤にして少年の方を睨んでいるのを見つけると、

いたずらを思いついた子供のような笑顔を顔いっぱい浮かべて、おじさんに話し掛けました。

「オッサン、やっぱ駄目だよ犯罪は、捕まっちゃうよ。それとも別に捕まっても良いと思ってる訳？」

おじさんはもう我慢も限界に来ているようです。顔は既に赤いキングス イムになっています。ですが、その少年はそれを面白がっているようで、ついにトドメの一言を放ってしまいました。

「あ、もしかして会社でリストラされてお金も無くて、その上妻と子供に逃げられて路頭に迷ってる？」

凶星だったようです。おじさんはとうとう切れてしまいました。

「この餓鬼イ、黙ってれば調子に乗りやがってふざけるな。私が一体何したって言うんだ（誘拐です）。私は会社のために汗水たらして働いていたんだ。いつもいつも残業でも耐えてきたんだ。それを何だ、いきなりクビだと、おまけに女房と子供はどこかに行ってしまうし、住んでいたアパートは追い出されるし、何で私ばかりがこんな目にあわなければならないんだ」

錯乱して、頼んでもいない自分の過去まで話しています。ですがその少年は、大した感情も抱いた様子も無く、あっけらかんと言いつ放ちました。

「んなもん俺の知ったことかよ、あんたの努力が足りなかったんじゃない？ あ、それよりも警察呼んであるからもうすぐ来ると思うよ」

「警…察……嘘だ、なんで私が…そんな……ウ、ウワアアア！」

おじさんはどうやら逝っちゃったようです。それまでサツキを掴んでいた手を離し、奇声をあげながら少年へ殴りかかっていきました。すると、少年はニヤツと笑い、突っ込んでくるおじさんの顔面に、思いっきりカウンターの右ストレートを放ちました。おじさんは、よほどそのパンチが効いたらしく、足元がおぼつきません。

「うるあ」

「ウワアアア！」

そこへ、少年が横から軽く蹴りを入れると、おじさんはよろよろと林に突っ込んで、そのまま気絶してしまいました。

「ダイジョブ？」

少年は振り向くと、啞然としているサツキに微笑みながら話し掛けました。サツキはその時、その微笑みに吸い込まれるような感覚を覚えました。

その微笑みは、今でもしっかりと皐月の目に焼き付いているそうです。

……血？

ああ、思い出した。そうだ、そうだった。俺はこの時から強くなるうって思ってたんだ。なぜなら、この話には続きがある。

「ダイジョブ？」

俺はその女の子に笑顔で聞いた。笑顔の方が安心するだろうと思っただけだ。

「え、あ、はい。大丈夫……です」

その女の子はオドオドしながら答えを返してきた。まあしょうがないだろうあんな目にあつた直後なのだから。俺はそんな彼女を氣遣つてなるべく明るく聞く。

「俺、阿久沢桂。君、名前は？」

「あ、え……と、名前は……」

そこでその女の子の表情は戸惑いから恐怖のそれへと変化した。俺の後ろの方を見て動けなくなっている。何だ？と思つて後ろを振り返ると、そこにはさつき俺が蹴り飛ばして林に突っ込んでいったオッサンが顔中血だらけにして物凄い形相で立っていた。そしてその手にはナイフが握られていた。

「このガキが！もう許さん、殺してやる！」

オッサンのその言葉は、やけに俺の心を動揺させた。こんなオッサン怖くもなんとも無いはずなのに。俺は思わず一步退いてしまった。それは俺の精神的な負けを表す後退だった。

「死ねえええええ！」

オッサンが叫びながらナイフで切りかかってくる。

「うわああああ！」

俺は普通なら軽く捌いて肘でも膝でも決めていたところを恐怖のため無様に逃げてしまった。俺はこのとき既に古武術を習つてはいたが、得物を持つている相手と戦うのはこれが初めてだった。いく

らませるといつてもたかが8歳のガキである、俺はその時完全にパニックに陥っていた。

「痛ウ」

散々逃げてはいたが、所詮何の型も無くただ無様に逃げただけである。とうとう俺は腕を切りつけられてしまった。

「……血？」

俺は血を見た。肘から手首にかけて切りつけられ、そこから流れる赤いドロドロした液体。それを見た瞬間、俺の思考は全て飛んだ。

「あ……あ……」

そこにあるのはただ恐怖のみ。俺は動けなかった。オッサンは妖しい笑みを浮かべながらナイフを手近づいてくる。

「は……は……死ね、死ね、死ねえ！」

オッサンはナイフを逆手に持ち俺の身体めがけて突き刺した。俺は反射的に眼を閉じた。

（死ぬんだ……俺……）

俺は本気でそう思った。だが、一向に痛みは襲ってこない。恐る恐る目を開けてみると、そこには地面に這いつくばっているオッサンと、そのオッサンを見下ろす一人の男がいた。

「隼人さん！」

俺は叫んだ。どうやら隼人さんが助けしてくれたらしい。

「桂、大丈夫か？」

隼人さんは慌てた様子で聞いてくる。

「あ、と、駄目かも……」

そこで俺は意識が途切れた。ただ、意識の途切れる前に目に入った女の子の心配そうな表情だけ妙に頭にこびりついていた。

それから後は余り覚えていない。病院のベットで目が覚めて、隼人さんにオッサンは警察に捕まったと聞かされ、それから女の子も帰ったと聞かされた。

「ありがとうございました。また会えると良いですね」

と伝言を残された事も。それを聞いて俺は安心したが、同時に悔しさが込み上げてきた。あんなオッサンごときに恐怖した事。隼人さんの手を煩わせてしまった事。何より、女の子ひとり自分だけじゃ護りきれなかった事。俺は、強さを求めた。何も出来ない自分は嫌だった。それから8年間、俺はずっと自分を鍛えてきた。もう何が俺をこうまでさせたのかもわからなくなっていた。そして、俺は再びその女の子と出会った。名前も知らない、俺が助け損なった少女と……。

日本最長の恋愛

沈黙。ホテルのロビーに静かなる時間がただ流れた。

「あの……思い出してくれましたか？」

真宮寺が声を発する。

「ああ、思い出した。何で忘れてたんだろうな、わかんねえや」

「そうですか、良かったです」

真宮寺は安心したようだった。

「あの時は悪かったな、結局助け切れなくて。情けねえや」

「そんな事ない！私は貴方に本当に感謝している。あの時あなたが来てくれていなかったら、私はどうなっていたかわからない」

俺の言葉に真宮寺は物凄い勢いで反論してきた。興奮しているのだろうが、口調が少し荒くなっている。俺は正直驚いた。こんな反論予測の範囲外だった。真宮寺は、俺の顔を見据えて話し出した。

「私は、貴方にちゃんとお礼が言いたかった。ずっと貴方に……ありがとうと言いたかった。あの時、伝言だけ残していったのがずっと心の中に引っかかっていた」

真宮寺は沈痛な面持ちでなおも話す。

「北海道に帰ってから、うつん、違う。貴方が助けてくれたあの時からずっと、貴方の笑顔が離れなかった。今も心に残ってる、貴方の笑顔。私は不思議だった。何で名前も知らない男の子の笑顔がこんなにも頭から離れないんだろう、何でこんなにも会いたいんだろうって」

真宮寺の言葉からは、真剣な響きが伝わってきた。

「悩んで、悩んで、悩んで、悩んで、ようやく気が付いた」

そして、真宮寺の表情が眩い光を放った。

「私は……私は貴方が好きだったんだって。私の夢見た運命の人は貴方だったんだって」

真宮寺は物凄く清らしい顔をしていた。心の奥に溜めていた思い

をまとめて吐き出したようだ。

「変ですよ、あんなほとんど一瞬の間一緒にいただけなのに。でも、この気持ちは本当です。私の想いは本物なんです」

俺は、どう反応して良いのかわからなかった。俺はこの女を助け損ねたのに、この女は俺の事を好きだと言った。その言葉に嘘があるとは思わない。それほど真剣な口調だった。けど……

「だけど、俺はあんたを助け損ねた。そんな俺にそんな言葉を受け取る資格は……」

「そんなこと関係ない！」

真宮寺は悲痛な叫びを上げる。

「私は、貴方が着てくれたとき、私は本当に王子様が着てくれたと思った。そして貴方は、私の心の中に貴方の居場所を作っていた。貴方がいつでも私の心の中に居てくれるような気がした。私にはそれで十分。資格とかそんなのは問題じゃない、貴方が愛しいの」

真宮寺のその言葉は俺の心を大きく揺らした。俺はこいつを助け損ねたのに、こいつはこんなに想ってくれている。なら俺はどうする。そんなの簡単じゃないか、考えるまでも無い。

「俺なんぞで良いのか？」

「貴方じゃなきゃ……ダメです」

「そうか……じゃあ俺たち日本最長の遠距離恋愛になる訳だ」

俺がそう言い終わるか否かの瞬間、皐月の顔が俺の顔の目の前まで来ると、唇に柔らかな感触がした。そして皐月は顔を赤らめて一言。

「はい、よろしくお願いします」

それから後、ホテルのロビーに居たため多くの客からなぜか拍手を浴びせられ、隼人さんから散々いじられて、皇紀に散々「幸せにしろよ」と念を押された後、俺は自分のホテルに帰った。次の日の試合は、もうどうでも良かったのでとっとと負けてしまった。表彰式が終わると、すぐに空港に行き、皐月と別れた。その後、俺は宮崎に帰った。

「……さてと」

部屋にパソコンの起動音が響く。パソコンが立ち上がると、俺はメールを読み始めた。もちろん皐月からだ。ちなみに件名は……」
『日本最長の恋愛』

日本最長の恋愛（後書き）

どうも、菖蒲です。

この小説をここまで読んでくださった方々、本当にありがとうございます。

さて、この作品、ホントに初期に書いたものでして、何気に自分の処女作だったりします。

今見返すとホントに下手すぎて恥ずかしい限りですが、敢えて、修正等は最小限に留めて出しました。

もしも、この小説で楽しんでいただけた方などがいらっしやれば幸いです。

ではまた、次作でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5473a/>

日本最長の恋愛？

2010年10月8日15時52分発行